

受賞した作家、朝井まかて「阿蘭陀西鶴」(講談社)、「二代男」を書いた大坂朝井。現代に生きる作家へべき存在を描いてみた

不賞・朝井まかて新作



佐藤慈子撮影

思うように書けずにつらい思いをした。「一緒にしたらおこがましいけれど、物書きが書かれへん苦しさは同じだと思っから」

これまで江戸の話を多く書いてきたが、地元大阪が舞台の今作は、関西弁の軽快なかけあいが魅力の一つ。盲目の娘が耳にする会話、感じる気配を通じて、大坂の町のざわめきがいきいきと伝わる。

直木賞受賞で注目される中で執筆になったが、本人は「いつもと同じですよ」と気にする様子がない。「力んでええもん書けるようなら、いくらでも力むけど」と爽やかに笑った。 本体1600円。(相崎歎)

「書かれへん苦しさ同じ」



の視点から書いた。一見野放図なようで、ふと不器用な優しさをのぞかせる西鶴の素顔が、2人の暮らしの描写を通して少しずつ像を結んでいく。 西鶴が執筆の壁にぶつかる場面には、書き手としての自身の経験を重ねた。「筆を放したらそこで道は終いになるとわかってるのに、前が見えへん」。西鶴を読んでいた昨夏、自身も

大阪文学学校 23年ぶり交代

作家の田辺聖子さんと朝井まかてさんが学んだ大阪文学学校(大阪市中央区)の校長が10月、23年ぶりに交代する。1991年から校長を務めてきた詩人の長谷川龍生さん(86)から詩人の細見和之さん(52)が引き継ぐ。 学校を運営する一般社団法人、大阪文学協会の代表理事は、作家の高島寛さん(77)から作家の葉山郁生さん(65)に交代する。細見さんと葉山さんは、ともに大阪文学学校の修了生。

8日に会見した細見さんは「文学は生活の糧にはなりにくい、生きる糧にはなる。23、24歳の頃の僕もそうだった。文学のそういうところを改めて考えたい」。葉山さんは「大阪ががんばらないと、九州も名古屋もがんなれない。大言壮語だけれど、地域から世界文学を目指す姿勢があつていい」と語った。 大阪文学学校は1954年創立。60周年を機に若返りを図る。初代校長は詩人の故小野十三郎で、細見さんは3人目の校長になる。(相崎歎)

元大阪大学総長・免疫学者 岸本忠三(75)

暗記の日々 山村先生に会い一変

最初は臨床医でした。 「こんな世界があるのかー」 といって、終わり。そういう研究もと医者になる気はなか。 ピカールと目の前が明るく輝く。 は少なくありません。でも、医

ること」(共和国)では、米国発祥で日本でも人気を呼んでいるフードコートを、極めて現代的な食事形態として紹介している。「バラバラな価値観を持った個人が、とにかく『集合している』という事実を得られる空間」。一般化している個食を維持したまま、同じ場を囲める食の形だという。

地元の食を重視する各地の動きが活発化し、全国から講演依頼が相次いでいるという。「その土地の食材と一緒に食べながら現地の人と語りあう。それが研究でもあり、楽しみでもあります」 (河野通高)

京大人文学研究所准教授 藤原辰史さん(37)

「食」に表れる 時代の思想

食を通して、その時代の思想を読み解く人文学者。2年前に出版した「ナチスのキッチン」(水声社)は膨大な資料をもとに、ナチス時代のドイツでは頑強な兵士をつくるため、主婦には厳格な食所仕事で課されていたと説いた。高い評価を受け、第1回河合準雄学芸賞を受賞した。

育った経験から、京都大で食と人との関わりを研究対象にするようになった。「食はコミュニケーションの場。ナマのメディアと言ってもいい。一緒に食べると風邪もうつるし、殴り合いだって起きるでしょう。でも、交わされる情報は量も多いし質も高く、その場自体に思想が表れています」

6月に出版した「食べること考

島根県出身。山間部の米作農家で



テーブルトーク

③

でも、結果的に、僕らが追っていたのと本庶さんのとは、違うものでした。 僕らは翌年に目標の遺伝子を探まえ「ネイチャー」に論文が載りました。これが後に、関節リウマチ薬「アクテムラ」につ